

昭和二十四年七月二十日
発行(種類郵便物認可)

(通第三五一號)

慈

光

第三十卷

第九号

次

如來とは何ぞや	近角常觀	(1)
ころ	福島政雄	(8)
自照日誌抄(三)	西元宗助	(12)
私の詩と信仰(二)	木村無相	(15)
生きる・生かされる	花田正夫	(21)

如來とは何ぞや

近角常観

如來とは何ぞやという問いは信仰問題における最初の問い合わせにして、かつ最終の問い合わせである。否、信仰問題における唯一の問い合わせである。もしこの問い合わせに対して中心満足なる念を得られたならば、それこそ眞実の信仰である。主觀であるとか、客觀であるとか、概念の邪魔するあいだはあやしいものである。

如來を如實に知るということが信仰である。曇鸞大師は「實の如く修行し相應す」ということをいわれた。その実の如くとは「如來はこれ實相身なり、これ為物身なり」と知るなりと言われたが千古の大教訓である。實に如來を如實に如來なりと知りたるが信仰である、信順である、信知である、觀知である、如實修行である。

全体、漢文で書いたものは六ヶ敷いことに思うて、その真味を味いかねる弊がある。また和文で書いたものは、知らず識らずおろそかにするためにまた深重なる意義を味わ

い講釈や、論議をするよりは食うのが肝要である。

善導大師は「唯念佛の衆生をみそなわして、攝取して捨てたまわず、故に阿弥陀と名づく」と釈された。親鸞聖人はこれを和讃にせられて

十方微塵世界の念佛の衆生をみそなわし

攝取してすてざれば阿弥陀となづけたてまつる
と云われた。これ實に如來の真意義をつくしたものである。實に、念佛衆生、攝取不信といふことが阿弥陀仏の意義である。しかし、唯みそなわす、の文字を忘れてはならぬ。これを聖人は、
親鸞におきては、ただ念佛して弥陀にたすけられまいら
すべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別
の子細なきなり

と仰言つたことが、即ち如來の意義であり、阿弥陀の名義である。

善導大師は「唯念佛有りて光損を蒙る、まさに知るべし本願は最も強と為す」とい、、「但、阿弥陀仏を専念する衆生有りて、彼の仏の心光は常に是の人を照らし護して捨てず、總じて余の雜業の行者を照損すと論せず。これまた現生に護念される増上縁なり」とある。併して此意をも

つて、法然聖人の選択集には「弥陀の光明は余の行者を照らさず、唯念佛の行者を攝取すの文なり」と仰せられた。
して見れば、十方の衆生はいづれも唯念佛の一つをもつて攝取されるということである。云い換えると、如何なる善人でも、善そのものが、この絶対の慈悲に対してみれば善として役に立たぬ、また如何なる悪人もこの絶対の恵みをこうむつてみれば、惡として退けられぬ。太陽の前には如何なる燈火もその光を失い、如何なる場所もその闇が破られる、人間の為す善惡も如來の恵みの前には何等の効もなく、人間の造る惡業も如來の恵みの前には見捨てらるることなし、大切なのは唯如來の恵みに接することが肝要である。唯如來の御声を聞くことが肝要である。唯念佛である、唯信心である、弥陀の本願には老少善惡の人をえらばれず、唯信心を要とすとするべしである。

人生かくの如き絶対の恵みをこうむりて見れば、いわゆる善もほしからず、惡もおそれなしという境に達するのである。善のほしからざるは如來の本願に満足して見れば、この上に加えるべき善もなく、惡のおそれなしというは、如來の大悲にとかされて見れば、なお気にかかるべき惡もないのである。つまり人生の善惡は、如來大悲の恵みの下にはみな消え失せて、朝日の前の霜の如くである。

妙

御文の御教化は、如來を如實に知らせんためである、南無阿弥陀仏、それ自身が如來の真義を顯現されたものであつて、その如來の思召しをいただくこと自身が、つまり南無阿弥陀仏にほからぬことを示されたのである。

こう云うからとて徒らに宗学研究と思うてはならぬ。いな繁雜で、訓詁的、系統的の學問となつたのが、すでに如實にいただからである。主觀であるとか、客觀であるとかいう議論は、饅頭が甘いか、舌が甘いかというようなものである、甘いものは甘いというより外はない。勿論、饅頭を食うたのじやもの、それが甘くなくてどうなるものか。それかといつて食わずに甘いことがわかるものか。甘

弥陀智願の広海に 凡夫善惡の心水も

帰入しなればすなわちに 大悲心とぞ転ずる

清濁・大小様々の河の大海上に流入すれば同一の潮になる
よう、我々凡夫の善惡の心水も、如來大悲の海に入れば

唯南無阿彌陀仏といただく一つである、一切の善惡は如來の恵みの前には融けてしまうのである。これを憐愍善惡の凡夫人といわれる所以である。

善といふ惡といつてもみな凡夫である。そもそも善惡をえらばすといわれたのは、特に善導大師の「一切善惡の凡夫の往生を得るは、皆阿彌陀仏の大願業力に乗じて増上縁と為さざるはなきなり」というのが源である。然し聖人の教はたしかに聖德太子によつて人生的に導かれて、いられる。善導・法然の教えが、聖德太子によつて人生上に生かされてある。太子憲法の第十條の「彼是なるときは、我非なり。我是なるときは彼非なり。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ」とある、これ即ち一切善惡の凡夫の意味である、善惡ともにつまりは凡夫であるに過ぎぬのである。

如來の本願は、もと凡夫のためで、かねて聖者のためであるから、この様に善惡の凡夫といわるゆえんである。

とある。

龍樹菩薩は、易行道の菩薩をねい弱怯劣と名づけ、天親菩薩が一心帰命せられているが、それは煩惱成就のわれらが他力の信であると述べていられる。弥勒菩薩といえども、五道を展転として憂い勤苦すと自力の非なることを説かれている。そこに気づいて、自力の心をひるがえした以上は、結局われらと異なるところもなく唯念佛の一つである。

執持妙に「往生ほどの一大事凡夫のはからうべきにあらず、ひとすじに如來にまかせたてまつるべし。すべて凡夫にかぎらず、補處の弥勒をはじめとして、仏智の不思議をはからうべきにあらず、まして凡夫の浅智をや、かえすがえすも如來の御ちかいにまかせたてまつるべきなり」とあく我等と同様である。

仏智不思議の誓願を、聖徳皇のめぐみにて
正定聚に帰入して 補處の弥勒のごとくなり

龍樹の初歎喜地の菩薩といふことも、つまり如來の大悲

しかし聖者といえども決してその聖者の悟りが一分一厘間に合わぬ、和讃に

190 願力成就の報土には、自力の心行いたらねば
大小聖人みなながら 如來の弘誓に乘すなり

とある通りである。たとえば陛下の御恩をいただくには私有財産が如何に多くても、それは何のためにもならぬのである。恩賜をいただくときは、何人も一点自分の貧富は間にあわぬのである。絶対の信仰は南無阿彌陀仏一つである、たとい弥勒菩薩といえども一点自分の効をみとめぬのである。

266 像法のときの智人も 自力の諸教をさしおきて

時機相応の法なれば 念仏門にぞいりたまう
龍樹・天親の菩薩、像法のときの智人も、その自力が間に合わぬのである、それをひるがえすのである。

「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」というときは、我等は、いわんや悪人をやの方へ力をいれて、善人なおもて往生をとぐの方を軽く見るのであるが、善人が善人としてその力で往生をとげるのではない。「自力作善の人はひとえに他力をたのむこころかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず、しかれども自力のこころをひるがえして他力をたのみたてまつれば真実報土の往生をとぐるなり」

をいただきたる心多歡喜のこととなる。聖人は「しかれば真実の行信を獲れば、心に歡喜多きが故にこれを歎喜地と名づく。これを初果（菩薩初歎喜地のこと）に喻えれば、初果の聖者はなお睡眠、懶惰なれども二十九有（迷いの界）に至らず。いかにいわんや十方の群生海、この行信に帰すれば摂取不捨、故に阿彌陀と名づく、これを他力と曰う」と仰せられた。これ實に、善人なおもて往生をとぐの意味である。初果の聖者もなお自力をひるがえして真実の行信に帰したまゝときは摂取さるるのである、いかにいわんや十方群生海の我等、帰命の一念に摂取してすてたまわぬのである。一念帰命のとき初果の聖者すらなお仏はすてたまわぬのである、いわんや十方群生海の苦しめるものをすてたまうことのあるべき。これ實に他力の真意義である、しかもこれまで唯念佛の衆生をみそなわして摂取してすてたまわぬとの意味である。

このように如何なる聖者といえどもついには念佛の一道に帰入するの外はないのである、凡聖も逆説もひとしく廻入して、衆水の海に入りて一味の如しである。故に、大小の聖人、重輕の惡人、皆同じくひとしく選択の大宝海に帰して、念佛成仏すべし、と仰せられてある。

聖道自力の教は、ただに我等が行い得ないばかりではな

い、また實に此等の衆生に對して与えられた權化の教たるに過ぎないのである。人生真実の教としては、唯南無阿弥陀仏の一道あるのみである。如何なる聖者も、如何なる善人も皆心をひるがえして唯南無阿弥陀仏と帰命し奉るべきである、三世十方に唯南無阿弥陀仏の一法あるのみである。

72 聖道權仮の方便に、衆生ひさしくとどまりて
諸有に流転の身とぞなる 悲願の一乗帰命せよ

三世十方の諸仏といえどもみなこの南無阿弥陀仏を説くべく現われたまうたのである。行巻には、なおし大地の如し、三世十方の一切の如來を出生するが故に、と仰せられ、略文類には、三世のもろもろの如來、出世の正しき本意は、唯阿弥陀の不可思議の願を説かんとなりと仰せられてある。極言せば仏法は南無阿弥陀仏の外はない、一切経は南無阿弥陀仏を説かれたに外ならぬのである。

涅槃經の一道も南無阿弥陀仏である。華嚴經の無碍道も南無阿弥陀仏である。如來と言えば即ち尽十方無碍光如來である。

47

十方三世の無量慧 おなじく一如に乘してぞ

二智円満道平等、攝化隨縁不思議なり

48 弥陀の淨土に帰しぬれば、すなわち諸仏に帰するなり

相應せざらんと。禪・律なんぞこれ正法ならんとは、如何にも思い切った訓点である、念佛成仏これ真宗である。

歎異抄に、おおよそ煩惱惡業を断じつくしてのち本願を信ぜんのみぞ願にほこるおもいもなくてよかるべきに、煩惱を断じなば、すなわち仏なり、仏のためには五劫思惟の願その詮なくやましまさんと。實に、能く一念喜愛の心をおこせば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり、が真宗の真義である、否、聖人の自督である。

聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。これ五劫思惟の如來の本願をそのままいただきたまいたのである。如實修行し相應したもうたのである。見性・了心など出来ると思うているのは、如來の五劫思惟の御苦勞を空しくするものである、勿体ない極みである。

仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたるとなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりとしられていよいよたのもしくおぼゆるなり、とあるのが

49 一心をもて一仏を、ほむるは無碍人をほむるなり
信心歡喜慶所聞 乃がい一念至心者
南無不可思議光仏頭面に禮したてまつれ
結局は尽十方無碍光如來である。

その如來を知るというは、如來はこれ實相身なり、為物身なりと知ることである。一如法界のみやこより法藏菩薩と名告らせたまいて、我等を救いたまわんとて、本願一実の道を示したまうたのである。大小の聖人、重輕の悪人、十方の衆生を救いたまわんとて唯南無阿弥陀仏の大行を与えたまうたのである。親鸞におきてはただ念佛して弥陀にたすけられまいまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信するほかに別の子細なきなり、これ如來を知られたのである、如來を信知したのである、如來に如實修行相應したのである。

相應というは、疊鸞大師は函蓋相称するが如しと仰せられてある。如來は持戒・持律も得道の法にあらず、坐禪・観念も成仏の法にあらず。十方の衆生唯念佛一法のみをもつて救濟せんと誓いたまう。法照禪師の釈を聖人訓読してのたまわく、禪林如何ぞこれ正法ならむ、念佛三昧これ真宗なり。性を見、心を了るはすなわちは仏なり、如何が道理なのは、實に如來を空しくするものである。それも實際に善くすることが出来ればよいが、全く不可能のことである。その不可能の身でありながら出来ると思うてているのが自力作善である。それ故、聖人は濁世の道俗、よくおのれが能を思量せよ、と仰せられるのである。

罪惡觀という言葉は、自己の価値以下に自己を評価することの様に思うのは大きな誤りである。眞に我等は凡愚底下である、それなのにまだ価値があるようと考えているのが根本的に誤りである。我等凡愚底下的者をあわれみたまいて御苦勞下されたのが五劫思惟の本願である、その御苦勞をいたたくのが如實修行である、函蓋相應である。眞に罪惡の自覺である、機の深信である。

そのゆえは自余の行をはげみて仏になるべかりける身が念佛をもうして地獄にもおちて候わばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候わぬ。いずれの行もおよびがたき身なれば、地獄は一定すみかぞかし。これ實に選択の願心をいただかれたる聖人の本願相應の徳である。

これを要するに、如来とは何ぞやというは、我等が如き

罪惡嚴重の者を飽くまで見捨てたまわぬという大慈大悲にて

てまします。我等は善も役にたたず、惡も致し方なし、か

くの如き我等を、唯たすけんとの仰せが南無阿弥陀仏にて

まします。これを行ざるばかりである、これを信ずるばかり

りである。念佛は淨土にうまるる業か、地獄におちる業

か、さらに存知せず。よしんば法然上人にすかされたりと

てさらに後悔はないのである。なんとなれば我等が如き、

何れの行もおよびがたい者に、それを見捨てたまわぬ大慈

大悲にてましますから、私一人がためなりけり、この如來

ましまさづば地獄は必定の我等なり。これが如実修行であ

る、名義相応である。

南無阿弥陀仏を南無阿弥陀仏といただいたのである。



こ こ ろ

求道について

求道というは真実道を求めるのである。この天地人生の「まこと」を求めるのである。

人生の行路はすでに六十五年、自ら省れば迷妄と虚偽（こけ）との一步一歩の間に、久遠の真実生命ともいいうべき仏陀のまことに導かれて来つて、今日なお生の歩みをつづけている。

二十歳の初めに理想に燃えたこの身が、二十六歳の夏七月翻然として百八十度の転回を行い、その後はただ人生の無常と、この身の煩惱とに苦しみ、しかもその苦惱の中をつらぬく真実の慈悲と智慧との心光は、私をして苦惱の唯中に静かに求道の歩みをつづけさせてている。

そこに不可思議の世界がある。

苦しみの中に何となく悠々としている。自己のみにくさに悲しみながら言わばあつかましい態度で生活を続けてい る。その根源は何であるか、それは不可称不可説の世界で

仏足石

玉尾延忠

思ひ來し仏足石は臥す^{こや}石苔^{いは}なり濡れて彫り著く見ゆ

塙の際に臥す円^{まろ}らの大き石积迦の足裏刻みたまへり

折からの雨にしどとに石濡れて刻める御足跡^{みあと}つばらかに見ゆ

色もなくかたちもましまさぬありやうを知らしめむと

御足跡の石は

丈六の身丈なる大き御足跡^あかもあひ見えむと起ち上りたり

みどり児を目守りて立たす觀世音妻子にたぐへ見れば親しき

慈母觀音

觀世音女性の相と見ゆれどもすがしその眸^{ひとみ}世のものならず

みどり児を目守りて立たす觀世音妻子にたぐへ見れば親しき

福島正雄

あるというより外はない。

求道は無限である。しかもその一步一歩に味わいがある。生命の道は前方に開けて見えているものではない。しかししながら人生の行路は一步毎に開けて来るものである。行くところとして可ならざるは無しというように、窮すれば必ず通じる。

ここには不可思議である。道を求めると言つても、道そのものが心の前に横たわっているのではない。心の求めて行くところに道が開けてくる。その道とは生きた道である、生き行く道である。

心は様々のすがたをあらわし、道は色々の角度から開けてくる。その趣きを人生行路の種々の点に立って味うのである。若きころがあり、中年の心があり、老境に向おうとする心がある。心は一心であるが、その姿形は様々である。しかもその様々のすがた形を一貫して変らぬものがある。それは久遠のまことである。

ある。それは私のいのちにうるおいと温か味とを与えるものである。それは慈悲の力として私のいのちにうるおいを与え、智慧の光としては私のいのちに輝きと温か味とを与える。天地人生をつらぬく不可称、不可説の大生命の流れである。

この久遠眞実の生命にはぐくまれて今日まで私は生きて来た。その生きて来た心のあとを誌したいのである。

人生の行路は難く、人間の苦惱は深い。しかもこの世の中には久遠のまことにめざめさせる縁がみちみちている。私はそのまことを世の人々にも知つて貰いたいとおもうのである。

(昭和二八・初夏)

自己のすがた

自己のすがたはなかなか見えるものではない。その見えるとおもるのは、多くは作り飾ったすがたであつて、決して如実のすがたではない。私の如実の姿は常に何物かの後にかれている。私は自己を美しく妄想して、その美化せられたる自己の幻の中に懈慢の夢をむさぼっている。

少年時代には、私は自己を清く美しいものと信じて居た。如何なる場合にも人を信じ、自己の心をそのまま打ちあけて、人の助言をもとめ、たとえ人から裏切られても、

た。そして本来が感情的である私は、しばしば講演に際して熱をあらわすことがある。私は諄々と説いて行くことが出来ない。熱してこれを談じ、直に人の肺肝にせまりたいという心持を大いに持つて居る。

それで孤独性で非社交的でありながら、人間に對して大いに求めるところがある。これはたしかに性格上の矛盾である。私ほど人間に對してむさぼりを持つ者は少ないかも知れぬ。私は相手の魂に触れなければ、人と話をしたような気がしない。實に私はこの上もない煩惱性の人間である。この性格が私をして人生に對する悩みを深からしめるのである。あっさりと風月を談じ、世間話をして交際していくのが、交際の法であろうが、私にはそれができない。したがつて私は始終人と魂の触れないことを考へて淋しがつて居るのである。

すなおに人生を見ることができないようになつた私が、最後に落ち着いて行くところは宗教の世界である。その宗教の世界というは、絶対無限の親心のまことの世界であり、私の魂はその親心のまことにうるおわされてひがみを直され、疑いをとかされて行くのである。

故に宗教の力は私の生命の根底に動いている。この宗教はにわかに鮮かな生活の革命となつて現われるようなものではない。空氣のようなものであり、日の光りのようなもの

その裏切られたことにさえ氣づかぬという有様であった。

人生は私の心眼の前には天国の園そのままであった。

さりながら、失樂園はすべての人のさだめである。二十年、三十年、四十年と人生の行路をたどる間に、いつしか、純真的心持は失われて行った。私はひがみと疑いとをもつて人生を見るようになった。如何なることが言われ、如何なることが行われるときでも、私はそれをすなおに受取ることが出来ないようになつた。私はつまらぬ猜疑の心をもつて人生を見るようになった。時としては、人生はすべて陥罕（おとしあな）だらけであるといふ心さえ起した。

元來が孤独性で、非社交的である私は、他人とうまく接觸し交際して行くことが出来ない。私は独り語りは出来

る、一人対一人の対話ならまだしも出来る。しかし三人以上の集りとなれば、私は全く駄目である。皆の心をよくまとめるような座談をすることは、私は出来ない。したがつて、會議などに列席して居るときも沈黙していることが多い。うまく機会をとらえて発言することが出来ないのである。

しかし、一方においてこの十余年の長い間、講演などに多く引き出されてばかり居た私は、講演の時ばかりは沈黙を破らざるを得なかつた。次第に私は講演することに慣れ

のである。或はまた米の飯のようなものである。味無きに味があり、平凡な生活を平凡につづけさせて行く生命的の泉である。

この宗教の世界において、私は始めて自己のすがたが見えてくる。光に照らされて自己の如実のすがたが見えて來るのである。親心のまことは、私がひがめばひがむほど私をあわれみたまう。その大悲の胸にいだかれて、私は煩惱の自己のすがたをそのままに見せつけられるのである。しかし見せつけられていたずらにその煩惱に悲泣するのではない。大悲の慈懷のうちにしみじみと涙するのである。

その涙は忘恩背徳の私が摂取せられ行く涙である。この世の中で様々の御恩を受けて居りながら御恩を思はず、自分が生い立つたのも、生きて行くのも、学問をするのも、子をそだてるのも、様々の御恩の力、ことにその根本をなす広大なる親心の御恩によるものであるものを、それをさとりもせず、他人の忘恩を責めて自分の背恩に気づかず、あくまで自己の正善を主張しようとする私の心、そこに私の根本我執があり、根源の阿賴耶（あらや）の無明の暗がある。久遠劫來の迷執のすがたこそは私のすがたであり、それは如何なる相対的努力修養によつてもよくならぬ、根本の病める魂のすがたである。

この姿は私が一時に全分を見ることの出来ない姿であ

る。私は生活上の実際問題に当面するとき、背恩の自己の有様に驚き、そこに久遠劫來の我執の自分の姿を見る。即ち実際問題を縁として私は自己の姿にめざめて行く。この自覚こそは大悲の親心の心光裡の自覚であり、それはやがて私の生命の根源をうるおして、私は自己の性格の偏執をもただこの親心にうるおわされて、静かに人生に立って行うべきことを行って行く。凡夫としての私の生活はこれに支えられて永劫にいたるのである。

(昭和九・七・九日)

心光のあと

日は暮れて道とほけれど御仏の久遠のひかりわれを照らすも

斯の道やたれか辿りし遠しろくひかりみなぎる永劫の道

聖の道つらぬきませし親鸞の自然法爾のみこころおもう

さびしさを語る人をなみひとりいてただ御仏の御名をとなうる

まことなき身をかへりみず世に立ちてまことありげなる此の身淋しき

御仏のまことのいのちしみじみと身にしみわたりただ念佛する

人の世のさがしき道に老の身をむち打ちて歩む一日ひとひよ

み仏のとはのひかりのなかりせばさがしき道にたおれ伏さまし

かへりみる五十余年のたましひの辿りのあとに心光煩らすも

七十路の齡経ぬれど矩を喻えずと孔子のたまう心境は遠し

◆ (昭和三十四年・心光のあと)

自 照 日 誌 抄 (三)

——念 仏 申 し つ つ ——

西 元 宗 助

暑いことです。しかしカッカツと身も心も燃える夏は、案外好きで、それは南国育ちのせいであろうかと思うことです。

さて多少の閑暇をえて漸く、親鸞聖人の「唯信鈔文意」の一部を拝読。その中に、屠(と)はよろずの生きたるもの殺しほぶるものなり。沽(こ)はよろずのものを売り買うものなり。これらを下類(げるい)といいうなり。かようのあしき人・獵師(りょうし)・さまざまの者は、みな石(いし)・瓦(かわら)・礫(つぶて)の如くなるわからなり、とある。このわらの御文字に目をみはる。

○ ちかごろしきりに、三願転入のことがわが身の上のこととして思案される。

なお、このお言葉は、唯信鈔文意の末尾に、愚禿親鸞八十五才、書之とあるのを見ても、聖人晩年のご信境であることは間違いない。つつしみかしこんで謹書させていただく。

十方の衆生が菩提心をおこし、もろもろの功德を修し至心に発願して、我国に生れんと欲せん、云々と誓われた十九願も亦、十八願と同様に大悲の本願である。われらはこの第十九願によつて、眞実の菩提心を発起しえず、諸の功德を修しえず、至心に発願しえずして、生死流転してやまぬわが機を知らされる。五逆誹謗正法のわが宿業を知らしめられる。自力かなわで流転するわが身を知らされる。

今日も汽車に乘つていながらつぐと省みさせられた。寸時もおれがおれがという自力の迷情を離れえざるわが身を。

そう申せば第二十願—果遂（かすい）の願はさらに痛切で有難い。たとい、われ仏をえたるに、十方の衆生（衆助）、わが名号をききて—わが國を係念（けねん）し、もうもろの徳本を植え、至心に廻向して、わが國に生れんと欲せん、果遂せば正覚をとらじと。

この大悲の二十願を承つてもその大悲の名号をわがものにし踏み台にし、罪福を信じてやまぬわが身。都合のよい時は、これも仏様のお蔭と一応は喜びながら、いったん都合が悪くなり思ひがけないことでも起れば、たちまちに神も仏もあるものかと悪態（あくたい）をたれるわが身。

要するに宿業ということを知らず、仏智疑惑の誹謗正法のわが身であることを知らず、出離の縁あることなく永劫に流转する身であることを知らざる我が身を、ついに信智せしめてやまぬものが、この大悲の二十願の本質であろう故に聖人は教行信証・化身土巻に三願転入を述べ給うて「果遂の誓、まことに故あるかな」と讀歎していられる。

かくて、この第二十願の根柢となり背景となつている大悲招喚の至心信楽の第十八願が、ついに本願の名号となって、わが身に信心徹到し給う。それを歎異抄第一条には端

的に、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいさせて往生をばとくるなりと信じて念佛申さんとおもい立つ心のおこるとき、すなわち攝取不捨の利益にあげけしめ給うなり」と、仰せになつていられる。

なおこの小文は日頃畏敬する岩本泰波（やすなみ）教授の最近の御論説の示教によるところが大きい。特に記して

謝意を表します。

ここまで書いて、慈光社に拙稿をお送りしたところ、印刷所の都合で八月号は残念ながら既に締め切り印刷に廻つてゐるとのことで。それで拙稿、いつたんご返却いただいて、本来ならばご遺慮して差控えるべきことを、そこは天下の凡人、左に追記させて頂く。

○

七月中旬のある日のこと、久しう振りに登校しないで家居していると、家内が、大谷さまからのお電話という。あわてて電話機を耳にあててみると、御門主のなつかしいお声。しかもこれから範子も子供も一緒に立寄りたいとおつしやる。私は、一そく狼狽し、当方からお伺いしますからと申し上げると、今日は特別に休暇をとったリラックスの日。今、お家から、そう遠くない〇〇まで来ている。それでクルマを運転してうかがいたいからとの仰せ。

わたしは、敬愛する御門主が、まだ新門でおありの頃

は、フトした御縁で、まことに楽しく交際させて頂いた。時には今は亡き金子大栄先生のお宅にもご案内出来たし、それから今はカナダの開教使をしている生田真成君と共に、名古屋の花田先生宅に聞法のために行つていただいた事など光真様には殊の他の感銘でおありだったようである。

（尤も私とちがい慎しみ深い花田先生は、そのことについて一口も「慈光」誌上では述べてはいられない。）

そんなことで自然、御結婚後はお嫁になられた範子さまにも親しくして頂けるようになつた。しかしその頃から、それは今しばらくのことと、門主の御地位につかれたら、お別れしなければならぬと心得、覚悟してきた。だから昭和五一年四月一日の法燈繼承式の日はまことに感慨が深かつた。じつさいそれ以来若い門主のことは愈頭にありながらも、お伺いすることは遠慮した。しかしそれだけに、たとえば昨年六月の惇（あつし）さま御誕生のことを承つたときや、又この冬であつたか、NHKテレビで本願寺の報恩講が放画された折、雪の御影堂を背景にして御門主夫妻と新門惇ちゃんが画面にうつり、しかも門主としてのりりしい決意表明の放送がなされたとき、わたしは深く感動した。

そんなことで、お立寄りくださるとのご電話のあつた



時、私はなつかしいやらともかく、あわてたのである。拙宅にお迎えした門主は、いやこの場合は光真さんであられよう、一品のよいスポーツシャツの軽装で、範子さまは、惇ちゃんをだっこされて、にこやか。ご挨拶もそこそこに、みんなの目は、一年と一ヶ月余の惇ちゃんの可愛い動作にあつまる。家内は家に備付けの孫のためのおもちゃを持って来て、あやそうとする。

さて閑談の中で、ご門主は「自照」が廃刊になつて惜しいとの仰せ、範子さまは、そのため私（西元）の『日誌抄』が読みなくなつて、といわれる。それで私、じつは五月以来、花田先生の『慈光』誌に拙文を載せて置いております。さつそく、お届けするよう依頼いたしましたと申し上げる。

○

お見送りしたあと、家内と共に、自然にお身にそなわるお人柄、なんとはなしに親しみのある。聰明でしかも品のあることなど話し合い、感謝した。本当によい一日であった。

私 の 詩 と 信 仰 (二)

木 村 無 相

三度三度、真言と淨土の間を迷い歩いているうちに、五十の坂を越した無相さんが、最後に落ちついた処は、いずれの行もおよび難い人間ほど助けてやりたいという、阿弥陀如来の本願に救われる世界でした。

自分の懶慢さに気づかされ、どうもがいても自分の力では助からぬと知られた時、同時に、如來の救いの手が差しのべられていることにも気づかされました、自分のあがきを捨てた處に、広がっていた世界でした。

※

ひらくもの
わがこころ
貝のごとくに
ふと閉じぬ
このかなしみを
ひらくもの
ただねんぶつの

ほかはなく
ただねんぶつの
ほかはなく
この蓋(ふた)を、この堅く閉じた蓋を、わが力では開けることが出来ません。蓋を閉じて、かたくなに蓋を開じて、開けようとすればする程、蓋は堅くなります。貝なども蓋を外から開けようとするほど、蓋は開かない。

ところが、お念佛さまはそうでない、外から蓋をこじあけようとするのではなく、内から、この煩惱熾盛の内ら

から、また、底からというか、一念も煩惱を離れずにこれを照らし、これを護り、そこに生きて働いて、このかたくなに閉じた蓋を内らで和らげて、他力自然に開けて下さるのです。念佛さまは、南無阿弥陀佛さまは――。

それで結局、私はいつの場合もナニかにつけて、ナンマ

ンダブツ・ナンマンダブツで『阿呆の一つ覚え』ですが、それも私が覚えているわけではなくて、念佛さまが忘れておくれぬ。南無阿弥陀佛さまが忘れておくれぬ。それこそ

『寝ても覚めてもへだてなく』私の煩惱の内らで働いていて下さって、この業人の口を開いて外に、ナンマンダブツ・ナンマンダブツと現われて下される――。

結局はいつも南無阿弥陀佛さまが、お念佛さまより他にならないというところに、立ち帰らせて下さるのです。

開かれると

自分が
ひらくれると

自分が
ひらくれると

自分が
ひらくれると
天地いっぱい――

※

そのまままで
信者になつたら
おしまいだ
信者になれぬ
そのまままで

ナンマンダブツ
ナンマンダブツ

『信者になれぬそのまままで、ナンマンダブツ・ナンマンダブツ』――ところがヨイツが、信者になりとうて、なりとうて、かなわんのです。ちょっととチャホヤされると、すぐ信者顔して喜んでいる。煩惱が喜ぶんですねえ。

けれども、信者にかかっている御本願ではないんでしょう。信者になれない、どうしても信者になることの出来ない私にかかる大悲の御本願なんでしょうから、信者になつてしまつては、もう聞こえない。それなのに、ちょっととチャホヤされると、すぐに嬉しがつて信者になつてしまつて、自分は聞こうとしない。聞かせやになつてしまつては、自分にはもう聞こえませんわ。

聖人の『唯信鈔文意』の中に『祇迦如來、よろずの善の

中より、名号をえらびとりて、五浊惡時・惡世界・惡衆・邪見・無信の者に与えたまえるなりと知るべし』とあります。私はこの『無信の者』といふ言葉に、いきなり足をはらわれたように、驚かされたのでした。

私がもとより『無信の者』であるのなら、私がどれだけ自分の力で信者になろうとしても、なれる筈がない。もともと信の芽が出るような種がない、根が無いのですから。

『信じて助かろう』にも『信せよ』言われても、『信心正因』言われても、どれだけ言われても——ところが、さあ、そう云われると、すぐに私は自分の胸を見る。そして有りもせん信心を探す。そして、無いということも、よくわからんのですねえ。わからんからこそ、なんとか此の凡夫持ち合せの心を働かせて、それで助かろうとするんです。何十年となくそうして来たんですけど、こんな者がどれだけバタバタしても、肝腎の信の根があるきり無い『無信の者』とあっては、なんとしても真実信心になれよう筈ではなく、私としては、「信」ということには、全くお手上げの外は無いのです。

そういう私に残された唯一の道は、如来さまが、『よろづの善の中より選びとりて』お与え下されるという南無阿弥陀仏の御名号を、たたたたお与えのままに、ナムアミダブツ・ナムアミダブツと、『惡衆生・邪見・無信の者』

体験・体験云つても、『歎異抄』にも『弥陀の誓願不思議に助けられまいさせて往生をば遂ぐるなり』とあって、『無相の体験に助けられまいさせて往生をば遂ぐるなり』とは無いです。それで『わたしの苦労話、ナニになる』で聞くべきものはひとえに『如來様の御苦勞である』と言うほかはありません。

私としても、真言時代ならともかく、聖人のみ教を聞かせていただく今としては、自分の苦労や体験めいたものに功を持たせるわけにいきません。

それで『如來さんの御苦勞に、わしや歎喜』と言つても、私の歎喜なんていうものは、ほんの一時的なものですから、『歎喜』というのもナムアミダブツ・歎喜というもナムアミダブツで如來様の御苦勞をナムアミダブツといたずらまんますが、私における歎喜であつて、御念佛の外に、ヤレ歎喜だ、ヤレ苦勞だ、ヤレ体験だと、腰かけるようなものは、ナニ一つ無いのです。

冬晴るる

遠きやまなみ
雪にかがやき
われ今ここに
いのち生くる

のまんまに、『信者になれぬ、そのままで』おいたたぎするより外に私の道は無いのです。

歎喜というもの

わたしの苦労ばなし
ナニになる
如來さんの御苦勞

聞く一つ——
『聞其名号 信心歎喜』
わたしゃ歎喜——

歎喜というも
ナムアミダブツ

歎喜というも
ナムアミダブツ

とかく人さんにお会いしますと、私は煩惱で自分の苦労ばなしをし勝ちです。また向うさんもそれをお尋ねになります。ところが、こんな者が一生だろうが万生だろうが、どれだけ苦勞したって、お助けの一段になると、こんな昔の苦勞や体験では助からんのです。

それで私は思うんです。

今日ひと日

ひと日のいのち

冬晴る

私は『われ今ここに、いのち生くる』というこん日ただ今の『生』に、『いのち』に、驚いているのですが、また、『今日ひと日、ひと日のいのち』という『今の無常』にも、此の齡(どし)になつて驚いています。

私、この老人ホームに来てマル四年になるんですが、定員五十名のこの老人ホームでも、毎年、三人や四人は亡くなるんです。ついこの間もお一人亡くなられました。

私は二十歳の時から、煩惱・煩惱・煩惱ばかりを苦にしてきましたが、無常ということはそれほど実感としてに問題にならなかつたんです。ところが、此処に来てからは、日ごろ親しく語り合つていた人が次ぎ次ぎと病みこんでは、ゴソリゴソリと亡くなられるので、さすがの私も無常ということを、身近に感じずには居られなくなつたのです。大体私は持病の腰痛が悪くなり、仕事が出来なくなつて、此処に入れてもらつたんですが、その上に去年の春頃から心臓の発作が度び度び起こるようになつて「こりや俺

も、いつどうなるかわからんなあ」と思うようになったのですが、そう思う時に、人生・人生といつても、今日一日・今日一日のことでしかないのだなあ、もつと言うと、

今のひと時、今のひと時より外に私の人生は無いんだなあ、そう思うようになったのです。

そう思うと、今、この今のひと時に自分の全分を打ちこまなければ、私の人生はなまぬるいものになってしまふ。

それでこの頃は、手紙を書く時も、こうして人さんにお会いする時も、本当に「一期一会」の思いで向わなければ、私の人生がつまらんものになってしまふと思うのです。ところが、日々の生活の実際では、かけがえのない今日一日を、今のひと時を、「ああ、つまらんことをしてるなあ、つまらんことを言ってるなあ、つまらんことに心を奪われているなあ」と思うことが多い私です。

ああ 幸 (さち)

雲みれば

雲の呼びかく

水みれば

水の呼びかく

お前の道は、南無阿弥陀仏より外にはないんだよ」と、もとの皆に呼びかけられている気がしてならないのです。

そうして、また、雲が、水が、天井が、壁が、私をとりまく一切が、ナンマンダブツ・ナンマンダブツと、大いなるイノチを讃嘆しているようにも思われるなんのです。

生を受けて七十四年、いろいろのことがありましたが、『ものみなに、呼びかけられつ』生かされ生きてあることの幸せを、しみじみと思うことです。

生きるということ

ああ

生きるということの

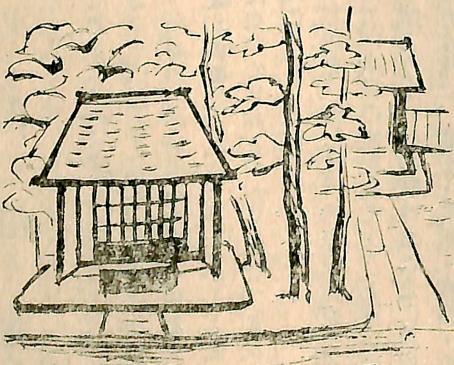
むつかしさ

生きるということの

ありがたさ

生きるということの

不思議さよ



のみみなに
呼びかけられつ

のみみなと
親しみ生くる

ああ
幸 幸

私に呼びかけている。雲が水が私に呼びかけている。ふと気づくと、のみみなが私に呼びかけている。時には、そう感じられる此の頃です。

この老人ホームは、どの部屋も六帖で、一室の定員は二人ですから、私の領分は此のまん中の電灯からこつち半分の三帖でして、私は腰痛が持病なので長く坐って居れず、机も無く、朝から晩まで殆んど寝床の中で読んだり書いたりしているんですが、寝ていてフト天井を見ても、みな私に呼びかけている――。

「無相よ、皆同じ大きいイノチの中に生かされているんだよ。そしてお前は、本願の名号以外には助かる道は無いんだよ。ああだ、こうだと朝から晩まで一日中、ゴタゴタといろいろ考えたり、言ったりしているが、詮ずるところ

生きるということ――

生きる・生かされる

花田正夫

NHKの宗教の時にこんな題を出されたので、ここ数日これを愚考したままを誌させていただく。

生きる道

私共が地上に生れると共に、自然に本能のままに泣き、笑い、動きはじめるが、それだけでは動物と同じで生存であって生活とは云えない。何か一つ生きる目的を持たない人間は生きていられないものである。福祉が世界で一番発達しているスエーデンにおいて、老人自殺が他の国とあまり差のないところからも、単に物質上で恵まれただけでは、生きる支えとはならないことが知らされる。

この生きる目的にも種々あるが、私は幸福を願つて、目を外に向け、名誉・財産・愛情を求めはじめた。しかし欲望は無限であるのに得られるものは極く僅かで、そこに不平と不満と焦慮が続く。俳人一茶が、五十すぎてやっと家を持ち、子が生れ、また次々に死んで苦の婆婆や花が開けばひらくとて

り、瓦をいくら磨いてもダイヤの光沢は出ないよう。そのうえに、のがれられぬ無常の嵐がおそうてくる。
為すこともなくてこのまま死ぬるかと、病める我が友、男泣きに泣きぬ

と詠じて亡くなつた人のことを聞くにつけ、又現に私の友人が、医学部三年の時、亡くなる直前に、

「自分は医者になつて病人をたすけようと思っていたが

こんなに早く自分が駄目になるとは知らなかつた！」

と悲痛な叫びをのこしたことも身に深く刻まれた。

私はこのようにして、煩惱に生きる道が閉ざされたのである。全く闇の砂漠のさすらいであった。

生かされる道

明日の希望を失つた者の常として、五感のたのしみを追う動物的生存において行つた。この時、私の伯父が、歎異抄を渡してくれたのである。そこに親鸞聖人の仰せ、

「煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなることあるべからざるがあわれみたまひて、願をおこしてまつる悪人もとも往生の正因なり」

とあつた。しかもその本願は、

「孝少、善惡のひとをえらばれず云々」

と詠じたように、得たよろこびには失う悲しみがつきまとっている。暗い陰のそわない喜びはない。

所詮は、幸せが山の彼方の空遠くあるかに見えるが、そこに行くと幻滅の悲哀に終る。だがしぶとい、おろかな私は、待てば海路の日和と、ため息をつきながらも未来の夢を追うて性こりもなく旅して行く。

やがて、方向を一転して、自分自身をよくし、智慧をみがいて、そこに幸福の家を建てようと願いはじめた。然し、山中の賊よりも心中の賊はまことに難儀である。

先づ手当り次第に、儒教・道教・聖書・哲学書などを乱読して、先人の道をたどりはじめたが、思うにまかせぬ事ばかりであった。しかもその途上にあって、すこしでも善いことをするとそれに縛られ、思うにまかせぬと卑屈になる。又学校の成績でもよいと、そうでない人を見下げ、自分より上の人にねたみと卑下感がおこる。

その根本の原因是身にもつ煩惱によると知らされても、その始末がつかない、泥人形をどんなに洗つても泥ばかり

と、相対五分五分をこえた、絶対の真実であった。私は生れてから、相対差別の世界しか知らなかつたのに、善惡の凡夫をおへだてのない大慈悲心にふれたのである。

そこに、善惡にしばられ、智愚に毒せられる身も、何の心配もいらず、迎えて下さる魂のふるさとを知らされたのである。石川啄木の歌に

ふるさとの山に向いていうことなし

ふるさとの山はありがたきかな
というのがあるが、年を経て故郷の人びとは変つても、昔ながらの山も河も、あたたかく私共を向えてくれるに似て、弥陀仏の本願のふところに、その趣きを知らされ、私の生かされる道が自然に定まつたのであつた。

しみこみ

しかし有限相対の身として、絶対なるまことは私の手のとどかぬ世界である。けれども、絶対なるまことは、相対の私をいつもつつみおさめて下さるのである。あだかも、親心子知らずであるが、親は知り得ぬ子を捨てることが、つねにはぐくみそだてて下さるのである。そのまことが、事にふれ、縁にあうては子にしみこんでくる。かと云つて子に親の全体がわかつたのではない、子のいのちのあら限りだんだんに深く広い親心がしみこんでくるのであ

る。

仮の眞実心も、種々な縁に催されて、だんだん強く、ふかく身にしみはじめるので、入信とはその気つきはじめである。その実際の様子を二、三あげてみよう。

※

それは、私の四十七歳の時であった。日本の終戦は私の四十二歳の夏であったので、焼け野となつた名古屋に帰つて、われひとと共に、衣・食・住のことで右往左往していたが、突然狭心症発作があつて、名大に入院して「心筋障害による発作だから、ヒビの入つた茶碗同様、無理するとこわれる、大切にして長持ちさすように」との診断であつた。

そこで外の仕事は全部やめて、小さな家に閉じこもらねばならなかつた。家内は内職探しをはじめたが、さて私自身はこれからどうして生きたらよいだろうかと、とつおいつしていいた時である。裏の庭に自然に生えたヘチマが細いつるを出して屋根にのぼつていた、そして一輪黄色な花をつけていた。戦後の花より団子の時代であつたが、病床からそれに見ほれないと、一匹の蝶がどこからかとんで来て、蜜を吸いはじめた。その刹那であった。良寛師の詩
花無心にして蝶を招き
蝶無心にして花を尋ね

その時間を超え、空間を越える力をもつ文字にくらべ、人間のいのちの短かさ！せまさ！私は思わず、文字を押しつだいた。そして、自分の時と處の限界をこえた文字をつかえ、そこに自分のいのちも、ここにもなげいれて余生をすごさせていただこうと心にきめた。

※

つぎに、私の六十五の春であった。突然多量の血尿が出て手当をうけた。その時、私ははじめて自分の死の横顔を見たのである。それまでは、生あれば死もある、生死は裏表であると云いもし、書きもしてきたが、本心では生きることばかりを考え、死は極力拒否し続けていた。
ところがそれが出来なくなつて、自分の死の横顔にふれたのである。そこは人間の言葉が通じなくなり、どんな人間の力もとどかなくなる。海上で孤舟が暴風雨にさらされたと同じである、遠い海浜では提灯を高くかげて、オーライ、オーライと呼びかけてくれる、それはありがたいことではあるが、自分を支えるものではない。独生独死、独去獨來のまづくら闇である。その時聖人のみ声が聞こえる。

「久遠劫より流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだ生れる安養の淨土はこいしからずそうろうこと、まことによくよく煩惱の興盛に候にこそ。なごり惜しくおもえども娑婆の縁つきて力なくしておわるとき、彼の土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこころなきものを

花開く時、蝶来り

蝶来る時、花開く

吾亦、人を知らず

人亦、吾を知らず

知らずして帝の則に従う

がひらめいた。それと同時に、私は毎日毎日、念佛の花をいただいてくらそう。あとは蝶が来ようが、蛾が来ようが、またそのまま飢死しようと、何事もおまかせであると、自然に道がひらけたのである。その時の腰折、生かされて生くばかりなりみほとけのふかきかいにみちびかれつ

と

と日記に書きつけた。心が定まるとき妙なもので、自分の身邊を落着いて、さて自分に出来ることはと探すと、すでに一年前から小冊子であるが「慈光」を発行している。病身でも書物を読み、原稿を書くことも出来るし、独坐していく月々同信の友と交流をさせていただき、共々に仏徳に浴する道がちゃんと恵まれていた。

同時にまた「文字」のあることのありがたさが大きく強く知らされた。それまでは文字を自分の使用人か、便利な道具ぐらいいに軽くあつかっていたが、これがあるおかげで時をこえて古人とも心がかよい、また遠方の人々とも文通が出来、さらに未来の人々にも語りかけることが出来る。

ことにあわれみたまうなり。これにつけてこそいよいよ大悲大願はたのもしく往生は決定と存じ候え云々」聖人の一語一語が、身にしみ體にとおうて伝わつてくる。そのまんま私の内からお念佛がうかぶ。そのお念佛の中から「死もまた我なり」とつぶやいた。一番いやな、拒否し続けた自分の死を受けとれたのである！それは隣家の犬に吠えつかれて泣き叫んでいた子も、母親に抱きあげられるときおそろしくなるのと同じ趣きである。

私は聖人のこの仰せをうけて、如来は今一人の私である、と渴仰した。煩惱興盛なために愛執愛着のとりことなつてゐる私に同座して下さつて、この心の底の底までお見抜きになつて、それがいかにも可哀想であると御一緒して、あくまでも捨てたまわぬのである。次に何時か心の底にのこされた蓮如上人の御歌
一人でも往かねばならぬ旅なるを、弥陀にひかれて行くぞうれしき

をも思い出されて、ありがたいことであった。

※

そのほか生活のいたるところに、さしのべられた大きな如來の御手を知られ、ここにも、あそこにもと驚かされると共に、鈍感な私にそのことを氣づかさせていただけるには、遠い昔から、くりかえしまさかえしおそだてであつた、その大きな御恩を御恩とも知らずに、御恩の中にはぐくまれていたことをかつ謝し、かつ愧じるのである。

あとがき

れつつ、それが自然におしえとなることを身をもって知らされることです。

天高く馬肥ゆ、と云い古した言葉が九月と共に思い出されます。彼岸も近づき、草木のみのるのを見ても心のみのりをいただきたいものです。

○「如來とは何ぞや」の近角先生の御言葉をとおして、聖人に導かれて念佛成仏の白道をたどらせていただきましょう。

仏様と申すと、キリスト教の天地創造の神とか、八百万の日本の神々、或は中国の天といつたものと混同し易い。特に日本人の習慣として、なに様でもまつる式なことからこの様に混同するのも一面無理のないことですが、人間眾尊が大悟され、地上に初めて出現され、更に一切の人々をも成仏せしめたいとの大慈悲心から教えがつたわってきました。その成仏の道を、親鸞聖人が身をもって念佛の中に見出されたのであります。謹んで聖人の洪恩が仰がれます。

○福島先生の著書「こころ」と、古稀の記念出版の「心光のあと」の両書から頂きました。先生にお会い申したように心あたためられるものがあります。

○西元様の日誌は、文字通り、五十三の善知識を訪ねて日々歩まれる善財童子の求道物語にふれるような思いがいたします。教育を専攻され、教育の本来の姿、教えら

○毎月第一、三日曜、午後一時半、名古屋一
道会例会。

南区駄上町二の八八。花田宅。

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋

目、左入る。

地下鉄、新瑞橋終点下車。名鉄、呼続下車

徒歩。

○毎月二十四日、午前・午後。昭和区小桜町

教西寺、法話会。

市バス、北山、又は御器所通り下車。地

下鉄、御器所下車。

○毎月七日、午後一時半。(日曜日は変更)

尾西市三条板倉、蓮光寺、修道会。

名鉄、新一宮駅よりバス、西三条下車。

○私は生きる道がとざされた時、生かされ

る道を開いて頂きましたが、その後もあら

ゆる生活面に、大慈悲の照護をこうむりな

がら、それに気づかずいることが沢山あ

ります。生ける日の限り、知られざる御恩

をすこしづつ氣付かせていただきたいもの

であります。臼杵祖山老師の遺詠に

大きいなるめぐみのなかにめぐまれて、恵

みもしらでみめぐみに生く

とありますことも、そのことを身をもって

教えて下さいます。知れた御恩は九牛の一

毛にすぎません、知られざる御恩に唯々合

掌作礼申すばかりであります。

△御案内▽

十月二十九日(日)に例年の通り京都市右京区山田開闢淨住寺、榎原徳草師の寺で京都一道会を催されます。御参會下さい。

発行所	振替口座	名古屋	電話	印 刷 人	編集・発行人	名古屋市南区駄上町二ノ八八	正 夫	花 田	七〇〇円(送共)	定 働 半 年
慈 光 社	四 五 七	愛知県西加茂郡三好町大字福谷	八二一局七〇三七番	坂 部 光 雄	名古屋市南区駄上町二ノ八八					一 年